

追悼

## 高橋康夫前理事長を偲ぶ



当協会前理事長 高橋康夫氏（享年76）は、令和5年4月14日  
にご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り致します。

### ■ 当協会でのご経歴 ■

平成12年～平成29年：評議員

平成29年～令和5年：代表理事（理事長）

## 高橋康夫先生を偲んで

京都大学大学院教授 富島 義幸

高橋康夫先生は、令和5年4月14日ご逝去されました。享年76でした。私は京都大学で学部・大学院と先生のご指導を受けてきた立場から、主に先生のご経歴と、研究者としてのご業績を中心にご紹介させていただくとともに、研究で一緒させていただいたときの思い出をいくつか述べさせていただきます。

先生は、昭和44年3月京都大学工学部建築学科を卒業、同46年3月同大学大学院工学研究科修士課程建築学専攻を修了されました。同年4月同大学工学部助手に採用され、昭和55年3月に京都大学博士（工学）の学位を授与されています。同56年12月講師、同62年4月助教授、平成7年7月教授に昇任され工学部建築学科建築史講座を担当されました。平成22年3月定年により退職され、京都大学名誉教授の称号を受けられました。

京都大学退職後は、平成22年4月から平成29年3月まで花園大学文学部文化遺産学科教授を務められ、平成29年6月より一般財団法人建築研究協会理事長、令和3年7月からは公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所理事長も務められていました。

学外においては、日本建築学会理事、建築史学会会長として都市史学・建築史学の発展に指導的役割を果たされ、東アジア建築文化国際会議京都2006においては実行委員長として会議を主宰し、都市史学・建築史学の国際交流に貢献されました。また、文部科学省文化審議会専門委員、京都府・京都市をはじめとする地方自治体の文化財保護審議会委員、京都市歴史的風致維持向上計画策定協議会座長・京都市歴史まちづくり推進会議座長などを務められ、専門の立場から文化財保護ならびに景観・まちづくり行政にも尽力されました。

高橋先生のご業績は膨大かつ多岐にわたりますが、もっとも中心となるのは日本中世都市史の研究です。京都を中心に都市の歴史的変遷を、建築やそこに住まう人びとの営みとともに明らかにする研究を展開し、『京都中世都市史研究』（思文閣出版、1983年）をはじめとする著書や多くの学術論文として発表され、今日の日本都市史学を築かれました。その成果は「中世京都に関する一連の都市史研究」として1994年日本建築学会賞（論文）を受賞しています。高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門』Ⅰ～Ⅲ（東京大学出版会、1989年～1990年）、高橋康夫ほか編『図集・日本都市史』（東京大学出版会、1993年）などでは、研究対象を京都から日本全国へ、時代も古代から近代まで広げ、都市史研究の成果を都市史学・建築史学をこえて広く普及させました。

また、建築史研究では、京町家という建築とその歴史的展開について、京都という都市の文脈の中で明らかにした『京町家・千年のあゆみ一都にいきづく住まいの原型』（学芸出版社、2001年）は、2001年度建築史学会賞を受賞しています。近年も京都と琉球を中心に研究を続けられ、『海の「京都」—日本琉球都市史研究』（京都大学学術出版会、2015年）、『京都と首里—古都の文化遺産研究』（文理閣、2020年）を発表するなど、都市史学・建築史学の発展に多大な貢献をされました。

これらの功績により令和5年4月14日付で従四位瑞宝小綬章を受けられました。

私は学部四回生から高橋先生の研究室でご指導を受けてきました。修士課程に進学したとき、先生はちょうど『図集 日本都市史』の執筆をはじめられたところで、そのお手伝いをつうじて学んだことが、私の研究スタイルを決定づけたと思います。なかでも大きく影響を受けたのは、都市史学の分野にとらわれることなく、日本史学や考古学・美術史学など多様な分野の、膨大な資料を集められ、それを都市史研究に活用していく姿勢です。ともすれば異分野の専門家が集まれば学際的研究といわれるなか、一人の研究者が専門をこえた史料や問題意識をもって新たな世界を構築していく、本当の意味での学際的研究のあり方を見せて下さいました。先生の都市史研究は、都市史学という新しい学問が、自由にいきいきと育っていく姿そのものだったように思います。

高橋先生の最後の大きなお仕事は琉球の研究でした。高橋先生はずいぶんと前から琉球の研究に取り組まれていましたが、先生の都市史研究の集大成ともなったと思います。琉球の都市・建築文化を、ユーラシアという広い地域のなかで評価・位置づけるという、壮大な構想をもって研究されていました。その成果は『海の「京都」』（ここでいう「京都」は首都のことで、先生が長年研究されてきた京都もふくまれます）という1000頁をこえる大著や、<sup>たまうどろん</sup>玉陵の沖縄県第一号の国宝建造物指定として結実しました（高橋康夫「国宝「玉陵」の魅力と謎」が本誌33号に掲載）。

さいわい、私も研究にご一緒させていただき、このとき改めて実感したのは、都市史の現場を見ることの大切さです。沖縄や東北の歴史的な場や建築を見ながらの議論をつうじて、今日見る都市は、たとえ過去から大きく姿を変えてしまっても、地形であったりスケール感であったり、気候・風土など現地を訪れなければ知ることのできないものがたくさんあることを伝えて下さいました。このように実際に見たもの、体感したものが、都市空間の実像・史実へと導いてくれます。先生にとっては、現地で見えるもの、体感するものも都市史研究の史料だったのだと思います。

先生は、限られた時間のなかで、関係する歴史史料を徹底的に集めたいうで立論されて

いました。分野を越えて多くの史料を蒐集し、それらを最大限にいかしながら歴史像を描いていく先生の歴史研究のスタイルは、史実に近づくための確実性の高い方法です。合理的ではあるものの、膨大な史料からの整合性ある立論には、思考のエネルギーと瞬発力が求められます。このような研究スタイルを、長年つづけていくことはとても難しいことと思いますが、先生は最後までこの姿勢をまもっておられました。

高橋先生は研究には厳しい一方、お人柄としてはとても暖かい方でした。調査や研究会の後、お酒や料理を楽しみながら、やさしい笑顔で研究の構想やご家族についてお話しされていたお姿が思い出されます。先生のお話には、研究のよろこび、奥様への深い思いやご子息への期待、お孫さんへの愛情があふれていました。私たち後進の者への思いやりと期待も。先生はご自身の研究を楽しみながら、私たちを育ててくださいました。書いても書き切れない高橋先生の学恩に感謝申し上げるとともに、心よりご冥福をお祈りいたします。